祐天上人のご臨終

大正大学教授　玉山成元

ことのほか暑かった享保三年（一七一八）の夏六月、麻布竜土の閑室で過された祐天上人の体は衰弱していった。しかし、いつものお念仏や勤行はいうまでもなく、名号を書くことも怠ることがなかった。おそばについている人々は、暑さが厳しいので、さぞ疲れるだろうと心配し、少し休まれたらいかがかと申しあげると「生身の人間はいつ死ぬかわからない。むだな時間を過せば自分の体にはらくかもしれないが、多くの人々を救うことにはならない」といい、少しも休むことがなかった。上人の意志の強さと実行力に感激し、涙を落さぬ人はなかったという。

七月十五日、朝の勤行の後、机に向って十余枚のお名号を書かれた上人は筆をおき、お十念を称えたのち、「これで自分の生涯の書写は終る」といった。その後ことのほか高声でお念仏を続けたが、正午になり、弟子らを集めていうことに、「自分が死んだら一宇を建立し、不断念仏を行って天下の安全と、法界の群生に施してもらいたい」といい、自ら鉦子をならして念仏を続けた。夜八時ごろになると、お迎えが近いからといって清潔な衣にきがえ、累のご利益があった本尊を安置し、百万遍念仏をとり行った。三十万遍ほど終ったとき、祐梅上人は祐天上人の側にゆき様子をうかがった。すでに臨終が近づいていたので、上人がもっていた仏舎利を取り出し、舎利水をお口の中に入れられた。さらに上人はお念仏の途中で、かねてからいわれていた白色の舎利一粒をお口の中に入れると、祐天上人は合掌をされ、頭北面西にして、安置されたご本尊からの糸をご自分の手に取り、かすかにお念仏を数十遍となえ、禅定に入るように遷化された。

七月十六日、午前六時、弁了・岸碩・香残の三上人が湯潅を行ない、一重の帷子の上に木蘭色の衣と二十五条の袈裟をつけられた。そして右の手には『阿弥陀経』、左の手には二輪の数珠を持たせた。ご遺体は、二枚の揚げ畳の上に座具をしいて安置したが、この上に白絹の蚊帳をつり、三方には金屏風を立て、その外に白い幕が張りめぐらされた。

七月十六日、増上寺の白随大僧正は昨夜につづいて焼香された。このとき役者の利天和尚らの役職にある人々をはじめ、仏殿の別当、三十坊の塔頭寺院などが全員でお供をし焼香をすませた。また伝通院・霊山寺・霊巌寺・幡随院の檀林寺院をはじめ、好身の寺院や僧侶まで数多くの人々が焼香された。そればかりでなく噂を聞きつけた沢山の信者が方々から集まり、せまい閑室はごった返し、矢来門は押し倒され、御居間の前のよし屏もふみ破られてしまった。そこで日頃から親しくしていた松平伊賀守や水野出羽守が心配し、小頭や足軽衆を警備の用員として送り、整理に当たるという状態であった。このように何としてもお焼香をし、結縁をしたいと願う人々は僧侶ばかりでなく、武士も商人も職人も、さまざまな人々が閑室をとり囲み、十七日のご出棺までとぎれることがなかった。

建暦二年（一二一二）正月、八十歳の

裕天上人のご臨終

大正大学教授　玉山成元

法然上人は老病が進み、体は思うようにならなかったが、たえず往生のことを語り、念仏を続けられた。　一月二十日ごろになると、上人は自ら三尊の来迎があったことを語り、散在していた信者たちは、庵室のある東山の上に紫雲が起るのを見るようになった。これは上人のご臨終が近いことをしらせたのだろうといって、多くの人々は結縁のため東山に集った。

正月二十三日から二十五日まで法然上人は弟子達と一緒に称える念仏の中で、あるときは一時間ほど力強く高声念仏を続け、あるときは静かに念仏を称えて休むことがなかった。そして二十五日の正午、慈覚大師から伝えられた袈裟をつけ、頭北面西にして「光明遍照十方世界　念仏衆生　摂取不捨」の文を称え禅定に入るように遷化された。

法然上人は遠大な考えをもたれた人で、目先の後継者や遺跡を決めることはなかった。念仏をする人が全て後継者であり、念仏の聞こえるところが全て自分の遺跡であるといわれたことは有名である。最後まで一人でも多くの念仏者が増え、世の中のよくなることを望んでいた。

そうした浄土宗の根本的な考え方を貫ぬいていったのが祐天上人である。

上人は自分のことはかまわず、天下が泰平で、万民が幸福になることを祈り、そのために念仏を布教し続け、自分の死後も不断念仏を続けて多くの人々を救済するようにと遺言している。まさに法然上人の生れかわりといってよい。